

## シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑥〕

### ～デカルトの独自の用法とその認識論～

村上吉男

#### 〈自動機械〉は「受容」と〈能動〉〈運動〉であること

デカルトの三用法の認識論の成立順に関して、筆者はこれまで何度か、彼が「日常的用法」の認識論を真先きに打ち出さずに、〈真理の探求〉と「もう一つの真理の探求」の各認識論を構想できなかったと指摘してきた<sup>(234)</sup>。そうした見方を可能にしたのは、彼が〈自動機械〉のことをいかに捉えていたかを筆者なりに知り得たところにあるからである。とどのつまり彼は「日常的用法」の認識論さえ、何より、精神ではなしに、身体を持ち出して、そのしくみを質す、自然科学的考察（生物学や生理学の領域）に立つことからはじめたといふことである。

近代哲学の始祖といわれるためか、デカルトは自らする解剖<sup>(235)</sup>での事実をもって、当時の自然科学の伝統的影響にもとらわれない、人間の身体の「しくみ」を語り、この観察に基づくからこそ、「日常的用法」の認識論的思想すら誕生させ得た。これが『世界論（光論）』の続篇とされる『人間論』であろう。そこには、物体（たとえば「光」）の〈運動〉を説く前者にかわって、人間の身体の「しくみ」の一に数えられ、〈自動機械〉に関する身体の〈運動〉のことが書き記される。筆者は、彼独自の〈自動機械〉〈運動〉の見方を加えて、従来のスコラ（哲）学と異なる思想（哲学）が展開されていくとみる。

その〈自動機械〉〈運動〉が人間にとって、「受容」と〈能動〉〈運動〉をさすことは前記した通りである<sup>(236)</sup>が、再度ここで、〈脳〉を含めた身体の〈運動〉に対し、人間は「受容」機能と〈能動〉を「先天的」に有すると別言しておく。そこでたとえば、身体の〈運動〉を、感覚の「受容」において、またこの感覚をここは、〈動物精気（血液）〉の仲立ちではなく、もっぱら〈神経〉とのかかわりにおいて、どうあるかが以下にまとめられる。デカルトがいうに、「受容」を可能にする身体は、身体内外諸器官であり、〈脳〉では何より〈腺〉や〈脳本体〉である。筆者がこれをみるに、「受容」〈運動〉における、〈脳〉のなかの〈腺〉や〈脳本体〉は、少なからず〈腺〉は〈精神（âme）〉と即座に呼んでならない（〈脳本体〉が〈能動〉たる諸能力のいわばすみかとしてあり、そのためもあって彼に端から〈理性的精神（âme raisonnable）〉と捉えられていたことはさらにあとで触れねばなるまい）。感覚は〈内的〉や〈外的対象〉が身体内外諸器官の一に「受容」され、ときにその一から〈脳（腺）〉へ、ときに〈腺〉から〈脳（脳本体）〉へと〈神経を介して〉「求心的」に伝わる。感覚の「受容」は各部位での機能は違えども、およそ共通した、筆者のいう「まったく〈自動機械〉」〈運動〉によるほかないし、その感覚の――は、もとより、ある身体器官の、〈腺〉の、〈脳本体〉のもとで、それぞれ〈sens〉、〈sentiment〉、〈passion〉という「新たな能力」になった。

だがなぜ各「新たな能力」が産出されるといえたのか。それは、〈理性的精神〉の諸能力

が「働きかける」〈運動〉に、要は〈能動〉たる「先天的」〈自動機械〉の、デカルトにいわせると、〈そのほかの自動機械（すなわち自分自身（自我）を動かすそのほかの機械）〉<sup>(237)</sup>の〈運動〉に従われるからであった。そこから、感覚における〈能動〉はこの感覚（〈sentir（感じる）〉）が〈理性的精神〉よりその〈神経を介して〉「遠心的」に〈出る〉〈そのほかの自動機械〉〈運動〉としてあるとともに、彼に一方で〈能動と受動はたえず同じ一つの事柄にさせずにはおかない〉<sup>(238)</sup>と語られては、「働きかける」〈能動〉が「新たな能力」をつくり、それが同時に、たとえば〈腺〉に「受容」された身体の〈sens〉自体を〈受動〉にさせる〈運動〉にする。そしてこのことは〈能動〉なくして、〈受動〉能力が生まれはしないし、かつ「精神優位」にならないというゆえんにする。

〈sentir〉が〈脳〉から「完全に」〈出〉たとき、当然〈sentir〉は〈脳〉を含めさせていう、身体（内外諸器官）にかかる以外にないであろう。たとえ身体内外各器官で「受容」される〈外的対象〉に「働きかける」ようにみえる〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉が、〈能動〉としての、身体の「新たな能力」〈sens（感覚）〉を身体内外各器官に生み出すとしても、身体の〈sens〉誕生に対応しようその「働きかける」能動能力は、〈sentir〉それ自身ではないということであった。〈sentir〉が関与するのは、〈脳〉内における別の「新たな能力」上記した〈sentiment（感覚）〉の産出にかぎられていた。この感覚を可能にする部位は〈脳〉中の〈腺〉であり、〈腺〉はその産出をもって、〈精神（âme）〉と捉え得た。だからデカルトは身体の〈sens〉の産出に際し、〈je vois la lumière, j'ouïs le bruit（わたしは光を見、騒音を聞く）〉の動詞と同様〈je ressens la chaleur（わたしは熱を感覚する）〉<sup>(239)</sup>の〈ressentir〉を充当させるしかなかったわけである。彼が〈ressentir〉を持ち出したのは、これ以外のことによるのか。否である<sup>(240)</sup>。そこではだから、〈sentir〉が身体内外諸器官の一の〈外的対象〉に対し「働きかける」ことはない指摘せずにおれない。もし人がそれに「働きかける」と見て取るならば、身体の〈sens〉が今みたように生み出されるのか、はたまた〈sentir〉は〈脳本体〉からくる能力として「働きかける」とすれば、身体の〈sens〉も精神の能力になるのか、さすれば身体内外諸器官でさえ、精神の各部位にみなされかねなくなろう。これでは〈sentir〉が〈不明瞭、難点、矛盾〉たる能力であることを意味させるにちがいない。しかしそれはあり得ないことである。

一方、「先天的」能力である〈ressentir〉は、当初より身体（内外諸器官）に備わり、身体を起点に生じる能力でなかった。その〈ressentir〉が〈理性的精神〉に属すことでは〈sentir〉と同種の能力である<sup>(241)</sup>が、それでもこれは、〈脳〉から「完全に」〈出〉た場合の、それゆえ身体（内外諸器官）にしか関与し得ない能力となった。そこで肝要なことは、〈ressentir〉が身体向けの使い方にあるだけでなく、〈sentir〉の〈思惟する〉〈自動機械〉〈運動〉さえ分担させられねばならぬ能力としてあると諒解することである。

だが以上のように理解できるはなぜか。デカルトにとって、〈理性的精神〉の諸能力だけが〈思惟する〉にかかわった。たとえば〈sentir〉は〈腺〉で、他の多くの能力は〈脳本体（理性的精神）〉ではじめて「働きかける」ことができた。要するに、これらの〈脳〉に当てはめ語られる諸能力は本来精神とされるところにしか属していないし、「はじめて」とは各能力の初出の扱いにあって、最初に「働きかける」ことをさす。そのうえ彼は身体を取り込んでいう「日常的用法」においてでさえ、この身体よりか、精神を優位に見立てていた感がある。したがって「日常的用法」での身体と精神の関係を説くとき、いわんやそ

の〈心身合一〉を主張するとき、彼は精神を優先させる視点をもって、身体との関係を、〈身〉との〈合一〉をみる。それには精神たることを明かすある能力を身体に関連させずして、身体とのつながりが見出せなくなるも当然である。しかしながら、ある能力という〈sentir〉がそれ自体、身体に「働きかける」となれば、身体はかの〈脳（精神）〉と同じに捉えられてしまうであろう。これでは身体を持ち出したうえで、身体との関係を説くことにはなり得ない。そこで彼は身体と関係させるべく、身体用の能力を、しかも〈sentir〉なる、いわば精神の息のかかった能力を対応させずにおねなくなる。それが〈ressentir〉であった。

だからデカルトにより、「身体用の能力」〈ressentir〉は身体（内外諸器官）で生じよう「新たな能力」を精神の〈sens（感覚）〉とせず、身体の〈sens（感覚）〉とするために用いられたと、また「〈sentir〉の息のかかった能力」〈ressentir〉は身体の〈sens〉の産出でも、〈思惟する〉という〈自分自身（自我）を動かす〉〈能動〉の〈自動機械〉〈運動〉を担わせられたといえる。ところで〈腺〉を、〈脳本体〉を、身体内外諸器官を一方で身体と名付ける際の、これら身体としての各〈運動〉には「受容」なる「まったき〈自動機械〉」〈運動〉がみられた。しかしこの〈運動〉のみでは身体の「新たな能力」はもたらされなかった。なぜなら彼にとって、「日常的用法」でさえこの〈運動〉が前提となるがゆえに、〈延長〉にしかみえない身体は、〈思惟する〉という〈能動〉〈運動〉を有しておらず、そのせいで、身体での「新たな能力」を産出し得ないからである。〈腺〉には、〈脳本体（理性的精神）〉を出所にし、端から後者の〈精神〉のとされる「先天的」な能力〈sentir〉が「働きかける」ことができた。別言すると彼が〈sentir〉たる〈能動〉で、「新たな能力」〈sentiment（感覚）〉の誕生の契機にさせては、〈腺〉を〈精神（âme）〉とみなすことになる。だが繰返しいうが、〈腺〉や〈脳本体〉なる身体はそれぞれ、〈sentir〉がかかわり、他の能力が存するおかげで、精神という語への置換が可能となるのに比べ、身体（内外諸器官）は、こうした〈能動〉の能力をもともと持っていないし、他方の精神に対峙させるうえでは、たえず身体の話のままにあるほかなかったのである。

そう指摘しおかねば、デカルトの主張する精神と身体との関係があることさえ明示されなくなり、彼が究極にこれらの〈合一〉をめがけんとする必要はなくなるにちがいない。否と答えるは、彼が身体に対する「新たな能力」を案出していたからである。「新たな能力」の導入なしに、〈心身〉が関係し、そこに〈合一〉が成るとはいえない。しかしかにはすれば、「新たな能力」を身体に当てはめ得ようか。それには「精神優位」の思想が適用されるほかない。身体自体はいかなる〈能動〉の能力も持ち合わせていなかった。それなのに、彼が〈心身〉の関係をなおも説くのであれば、精神だけが〈能動〉を有するとした「優位」を楯に取って、精神の〈能動〉の能力が身体に関与させるこの思想に立つ以外に、〈心身〉が関係することはあり得なくなろう。だから彼にとっては、たとえば〈理性的精神〉を〈出る〉〈sentir〉の〈腺〉へと「働きかける」ような能力が身体に対しても入り用になってきた。その能力とはいわずと知れたこと、身体にさえ利用された〈ressentir〉にほかなかったのである。

ところが、デカルトが〈能動〉の能力に〈ressentir〉を宛てがったにせよ、これを〈sentir〉の「息のかかった」精神の能力とみなし、この精神の能力を身体に取り込むようにしたは可能なのか。身体は精神の影響を受けるからして、精神に同化されてしまうのか。これで

は身体が身体のままに存するとの記述に〈矛盾〉しないのか。彼にあっては否である。なぜなら、〈ressentir〉は、〈sentir〉が〈理性的精神（脳本体）〉を〈出る〉としたのと同様に、そこを〈出る〉が、そればかりか、精神に関連ある〈脳〉から「完全に」〈出〉て「働きかける」能力でしかないからである。〈脳〉を「完全に」〈出〉たところは、身体（内外諸器官）のほかにはない。だからこのおのおの「働きかける」〈ressentir〉は、本来精神（理性的精神）以外にない〈能動〉であっても、身体に用いられる能力になるかぎり、「身体用の能力」であるといわざるを得なかったわけである。精神（理性的精神）から発する〈ressentir〉がなぜ「身体用の〈能動〉能力」となるのかは、彼にとって、精神と身体の関係構築するためであった。だから身体の方は、〈ressentir〉が「関係」するしないの如何にかかわらず、身体のままに存しているといえるであろう。

精神（理性的精神）の諸能力はすべて、〈能動〉であり、そのうえ〈思惟する〉ことにあった。つまり諸能力は〈思惟する〉という表現で、「働きかける」ことを可能にした。だから、〈思惟する〉は〈理性的精神〉だけが〈能動〉の諸能力を有することを証すばかりか、諸能力を一括させていう語<sup>(242)</sup>となるし、〈ressentir〉も当然〈penser（思惟する）〉一能力に加えられていなければならない。〈理性的精神（âme raisonnable）〉は「日常的用法」に使われる精神であった。しかし諸能力の一が、たとえば〈sentir〉（あるいは〈imaginer〉）が〈理性的精神（脳本体）〉から〈出〉て、〈脳〉内の〈腺〉に「働きかけ」、〈腺〉に「新たな能力（sentiment）」を産出させた時点で、〈腺〉が今度は〈精神（âme）〉に見立てられるにあっては、〈理性的精神〉の方は精神とみなされず、〈脳本体（身体）〉であるほかなかった。それでも〈sentir（感じる）〉たるこの〈思惟する〉は、〈脳本体〉や〈腺〉のいずれが精神にみられるかにかかわらず、精神内で「働きかける」にとどまろう、いわば精神用の能力でしかなかった。

「日常的用法」にとっての、デカルトの課題は、そこに身体が取り上げられるかぎり、〈脳〉を身体と捉える場合の身体がだけでなく、通常身体をさす身体内外諸器官が何か、〈脳〉や各身体内外器官の各名称は当時の言い方に倣うにしろ、〈脳（身体）〉を含めた身体個々の機能が何かを探らねばならぬはむろんのこと、個別の身体内外器官がその他の器官とどうつながるか、さらに彼はこの用法での精神を持ち出すのだから、身体は精神とかわり合うのか、かわるとするならば、両方をいかにかわらせ得るかなどをみることにあろう。彼は数々の実験<sup>(243)</sup>を通して、身体としての事実や〈心身〉の関連の事実を知るにちがいない。だが筆者がここにきて明確にさせねばならぬのは、彼が〈脳（身体）〉である〈脳本体〉を「先天的」精神（理性的精神）にみなしたことは、〈心身〉のいずれを優先させて、他とかわらせるためにあったかの、あるいは〈ressentir〉のことは、その〈自動機械〉のことはいかに理解されるかの問題に対してである。

これらにはもとより、精神を優先させて身体をみようとする「精神優位」の思想において、デカルトは〈心身〉問題を乗り越えたと答えておく以外にはない。だから〈心身〉の「関係」は、「日常的用法」でさえ端から〈思惟する〉を持ち得ないとした身体に精神が「働きかける」必要があるし、そこでは今まで語った通り、その身体に対しては、精神にだけ「働きかける」〈sentir〉ではなく、〈ressentir〉を〈思惟する〉「身体用の〈能動〉能力」としてかわらせずに成り立たなくなる。そうした見方でなくば、身体の「新たな能力」〈sens〉がどうして打ち出され得たのか不明であり、〈そのほかの自動機械〉すなわち

〈ressentir〉なる語も不要になるどころか、〈心身合一〉すらみえてこないであろう。

デカルトは精神と身体の「関係」を〈ressentir〉に仲介させては、精神が身体にかかわることを明らかにした。本来精神の一能力でしかない〈ressentir〉が〈心身〉の「関係」を問う際にのみ、身体用として使われずに、身体に〈能動〉たる〈思惟する〉ことが関与しなくなると同時に、〈思惟する〉ことによる「関係」が導き出されはしない。要するに精神の〈思惟する〉ことなしに、身体との「関係」が築かれることも、〈思惟する〉が身体に「働きかける」こともなくなる。この背景にあるのが「精神優位」の思想なのであり、〈ressentir〉を持ち込ませないで、「精神優位」の思想は活かされないわけである。そして〈思惟する〉ことを含有した〈ressentir〉が身体（内外諸器官）に「働きかけ」、身体で「新たな能力」〈sens〉を産出させるからして、〈ressentir〉は「身体用の〈能動〉能力」といえるし、そこに〈心身合一〉の一つの場合が成ると予測し得るのである。

筆者が〈ressentir〉について、上記四段落での記述にせざるを得なかったは何によるか、繰返しを含むやも知れぬが、ここで結語する必要がある。それは「精神優位」の思想に代表させられる〈ressentir〉の記述が、筆者にすると、シモーヌ・ヴェーユのいう〈デカルトらしき巧みな企て〉<sup>(244)</sup>なくして、書かれはしないといい得ることにある。それでは筆者の結語を〈巧みな企て〉にみんとし、筆者は〈巧みな企て〉を彼に試みさせたは何かに答えなくてはなるまい。〈巧みな企て〉自体は、彼の知的遊び心から発したこととは思われないが、しかし彼が精神と身体の「関係」を「精神優位」に捉えることや、たとえば〈感じる（感覚する）〉という語に対しては〈sentir〉に終始せず、〈ressentir〉を配しもすることで分かるように、少なくとも彼の思想（観念）の先行なしにもたらされはしないはずである。そこには彼のいわゆる《観念論》が窺える。だが「日常的用法」では、身体をはじめとする物質、とどのつまり自然はどう扱われたか。この場合、身体（自然）は彼にとって、知覚（経験）した身体（自然）をそのまま実在にみなす素朴実在論に与するかどうかはともかくも、観念（主観）から独立した客観的事実存在として認められるとする実在論の立場で語られることは確かである。身体を例に言えば、彼は実験によって、身体の「しくみ」の、〈血液〉の流れの、〈神経〉〈運動〉の事実を教わるし、事実を表わすに用い名付けた語句のことはとにかく、彼が事実を受け入れるところに立つのだから、実在論に依拠することは否定できないであろう。と同時に彼が、〈ressentir〉によって、身体の〈sens（感覚）〉が、また〈sentir〉によって、精神の〈sentiment（感覚）〉が生み出されると断じたり、精神にのみ〈能動〉能力があると指摘したりするは観念論によるほかならう。だから〈巧みな企て〉は上記の事実を踏まえつつも、そこに彼の思うがままに仕組ませ得る観念がないというならば、およそ試みられはしなかったにちがいない。

このことは、シモーヌ・ヴェーユのいう〈Que cet idéalisme et ce réalisme, tous deux extrême, soient pour lui (Descartes) non seulement conciliables, mais corrélatifs,... (両極端の観念論と実在論はデカルトにとって、たんに両立し得るだけでなく、相関的でもある ... ということ)〉<sup>(245)</sup>に当てはまるにせよ、他方で、〈Loin que le fait soit idéalisé jusqu'à n'être constitué que d'idées, ce sont les idées qui semblent... comme ramenées jusqu'au fait (事実が観念からしか構成されないまでに観念化されるところか、観念こそが事実にまで還元されるようにみえる) (点線部分は筆者)〉<sup>(246)</sup>という文章を参照にすると、彼女がそれでも観念論と実在論は〈両立〉する、〈相関的〉であるあり様を、〈事実〉が〈観念〉に

吸収されたり、〈観念〉がそのまま〈事実〉になったりするとみる以上、筆者もまた観念（論）が〈事実〉（實在（論））に勝ると理解しておかねばならない（観念論すなわち「精神優位」の思想が優先するはだから、この「日常的用法」のほか、〈真理の探求〉や「もう一つの真理の探求」に対しても推して知るべしなのである）。とどのつまり「日常的用法」も、身体を精神と同等に扱わないだけでなく、精神と身体の二元論的思想を引き摺るかのように考えられていたことによって、こうした観念論をして事実（身体）に優先たらしめると判断せずにおれないのである。

これを明かしてくれたのは繰返すが、〈自動機械〉なのであった。〈自動機械〉には血管における〈血液（動物精気）〉の循環〈運動〉もみられるが、ここでは〈神経〉における〈運動〉をさす。筆者はこの〈自動機械〉〈運動〉に対し、「受容」なる「まったき〈自動機械〉」と〈能動〉なる〈そのほかの自動機械〉の二つがあると指摘し得たなかで、ここには〈思惟（意志）する〉が加わらない「まったき〈自動機械〉」〈運動〉ではなく、当然〈思惟（意志）する〉が加わる〈そのほかの自動機械〉〈運動〉になる。なぜならこの〈運動〉なしに、身体や精神に各「新たな能力」が産出されなかったといえるからである。そこで筆者は今一度、〈そのほかの自動機械〉〈運動〉のことを、感覚の場合の「新たな能力」の産出過程に換言させてみる、新しい小見出しでもって次号にまとめることにし、この辺りで「〈自動機械〉は「受容」と〈能動〉〈運動〉であること」の小見出しに関する説明を終えることにする。

### デカルトのいう感覚〈ressentir〉と〈sens〉、〈sentir〉と〈sentiment〉、〈vouloir〉と〈passion〉、〈ressentir〉と〈affection〉や〈émotion〉について各いえること

〈ressentir〉たる、〈思惟する〉〈能動〉の能力は、ことの初めから身体能力として身体に存するのではなかった。もしこれが身体にあるとされるならば、身体は、「日常的用法」と〈心身合一〉は何のためにデカルトに取り上げられたのか、疑問のままにとどまろう。そういうことではなかった。〈ressentir〉は本来精神（理性的精神）の一能力であり、唯一身体に「働きかける」ことのできる「身体用の能力」であり得るからこそ、精神が身体に「関係」を及ぼすことを可能にしたのである。このように、精神の方が身体を「関係」づけさすのであって、この逆ではない。ここに「精神優位」の思想が導入されるうえでの「関係」が成り立ってくる。

精神と身体「関係」を確立させるには再度いうが、精神からする〈能動〉が必要となる。デカルトはこれを〈sentir〉ではなく、〈ressentir〉に担わせた。そこで彼はおそらく「身体用」向けに、「再び」という接頭辞を付けて〈sentir〉の「息のかかった」能力のように表わすほかなかったと思われるし、筆者は筆者でこの「再び感じる」の「感じる」を、精神用の能力の意味を消し去るべく、〈再び感覚する〉や〈感覚する〉と訳したわけである。

それでも〈ressentir〉が身体内外諸器官に〈感覚する〉〈思惟〉となって「働きかける」と受け取られないならば、〈感覚する〉が〈sentir〉を含めた、〈能動〉の諸能力の居所となる精神（理性的精神）すなわち〈脳本体〉以外の〈脳〉に存し、そこから発せられることを予測させもするであろう。

すると〈脳〉に〈能動〉なる〈自動機械〉〈運動〉の出所が複数あるということなのか。否である。なぜならデカルトが〈autre automate (c'est-à-dire autre machine qui se meut de soi-même)〉(そのほかの自動機械(すなわち自分自身(自我)を動かすそのほかの機械))<sup>(247)</sup>と記した通り、〈automate〉や〈machine〉のいずれもが単数で表わされるからである。これは彼が〈自動機械〉や〈機械〉に対し、身体内外諸器官への、また〈腺〉と〈脳本体〉への各「受容」の〈自動機械〉(〈運動〉)を取り上げるほかに、これらの部位での各「受容」能力にそれぞれ、〈自分自身(自我)を動かす〉〈automate〉とした、単数表記の〈そのほかの〉なる〈自動機械〉が〈思惟する(感覚する、感じる、意志する)〉ように〈運動〉することを、しかも〈自我を動かす〉にあつては、この〈自動機械〉は精神(理性的精神)にだけ存する諸能力が〈能動〉すなわち「働きかける」にあることを示唆させた。身体内外各器官にとって、「精神優位」を証す〈自我(わたし)を動かす〉しはじめで、精神と身体「関係」やその〈心身合一〉も成るとされるのだから、かの〈ressentir〉がこうした「関係」や〈心身合一〉を可能にさせる役割を引き受けざるを得なくなった。

〈理性的精神(脳本体)〉の諸能力のうち、そこから〈出〉て〈脳〉内の〈腺〉に「働きかける」能力は〈sentir〉(や〈imaginer〉)であり、〈脳本体〉からはむしろのこと、〈脳〉(全体)から「完全に」〈出〉て身体内外諸器官のいずれにも「働きかける」能力は〈ressentir〉(や〈imaginer〉)であった<sup>(248)</sup>。これ以外の〈思惟する〉能力はすべて〈脳本体〉内で「働きかける」ことになる(〈sentir〉(や〈imaginer〉)が〈脳本体〉から〈出る〉ことで、そこに残された諸能力は〈理性的〉諸能力ばかりである。だからデカルトは〈脳本体〉をさして、〈理性的精神〉と名付けたと推察できるは前記した通りである)。各能力が各「働きかける」ことで、おのおの〈腺〉で、身体内外諸器官で、〈脳本体〉で各「新たな能力」(感覚でいえば、上記部位順に〈sentiment〉, 〈sens〉, 〈passion〉)を産出させた。「働きかける」〈能動〉が〈能動〉としての「新たな能力」の産出を可能にする、いわば呼び水となり、なかでも〈腺〉での「新たな能力」の産出が、身体である〈腺〉を〈精神(âme)〉にした。そのとき〈脳〉に二つの精神があるわけにいかぬから、彼はそれまで精神(理性的精神)とみなしていた〈脳本体〉を身体にみるしかなかった(むしろ〈腺〉が〈âme〉にならないときは、〈脳本体〉が〈âme raisonnable〉であることに間違いはない。これも〈巧みな企て〉の一となる)。「新たな能力」は〈能動〉たる〈思惟する〉ことによって生まれた。〈思惟する〉ことは「日常的用法」でさえ、〈精神(âmeとâme raisonnable)〉に関与した能力をさすばかりか、こうした精神そのものをいうとともに、この〈精神〉と身体を含ませて捉えねばならぬ〈わたし〉であることになる。彼において、この〈精神〉そのような〈わたし〉であるためには、〈思惟する〉なかでの〈ressentir〉, 〈sentir〉, 〈vouloir〉が何より優先されなければならなくなる。それはまたこの〈精神〉が身体で「働きかける」ことができるという「精神優位」の思想なしに考えられなかったことである。

ここで筆者は再度、「新たな能力」について振り返っておく。デカルトは身体内外諸器官で、ときに〈脳(腺)〉で、ときに〈脳(脳本体)〉で、各「受容」される〈外的対象〉, 〈sens〉, 〈sentiment〉のそれぞれに〈ressentir〉が、〈sentir〉が、〈vouloir〉が各「働きかけ」ては、各身体部位(内外諸器官、〈腺〉, 〈脳本体〉)での各「受容」能力を〈能動〉としての、〈sens〉, 〈sentiment〉, 〈passion〉にすると主張した。ただし上記は、ある身体内外器官に「受容」された何らかの〈内外的对象〉が、ある身体内外器官から〈腺〉, ここ

を通り〈脳本体〉までの「求心的」〈神経〉により伝えられる場合である。したがって、たとえばある身体内外器官に産出した身体の〈sens〉が〈腺〉と〈脳本体〉に伝わらず、ある身体内外器官で産出後自然消滅するような場合を語るのとはここでは除かれようし、また〈腺〉に産出した〈sentiment〉がその後、消滅する場合も同様である。

とまれ上記した身体部位の順序で（もはやこの順序であるほかないと思われるのだが）述べると、「新たな能力」は各身体部位で以下のごとくに生み出されてこよう。すなわちまず、ある身体内外器官に「受容」される何らかの〈内外的对象〉に、〈ressentir〉が「働きかける」と、ある身体内外器官で身体の〈sens〉という「新たな能力」を産出した。次に、その身体の〈sens〉の〈腺〉への伝達にあつて、〈腺〉に「受容」されるその身体の〈sens〉に、〈sentir〉が「働きかける」と、〈腺〉で〈sentiment〉という「新たな能力」を産出した（この産出段階で〈腺〉は〈精神（âme）〉とみなされた）。そして、〈精神〉の〈sentiment〉のなかの、〈腺〉に〈表出〉せずに、「〈細糸が結合したり、からまったり〉」<sup>(249)</sup>しない、要は「〈細糸が互いに離れてい〉る」<sup>(250)</sup>ままの〈sentiment〉の〈脳本体〉への伝達にあつて、〈脳本体〉に「受容」される註(250)の〈sentiment〉に、〈脳本体〉内にしかない諸能力〈vouloir〉などが各「働きかける」と、〈脳本体（理性的精神）〉で〈passion〉という、上記の「新たな能力」と同様、〈能動〉としての「新たな能力」を産出したと。

デカルトにあつて、精神（理性的精神）がたとえば目という身体の〈外的感覚器官〉で、〈外的対象（物体）〉を見ようと命じる（〈思惟（意志）する〉すなわち〈ressentir（感覚する）〉）とき、目は〈物体（延長）〉を〈外的対象〉として受け入れるはむろんのこと、この「受容」は同時に目（身体）での、〈受動〉たる〈sens（感覚）〉にさせるにちがいない（これ以外の例はここでは省くが、おそらく目に〈外的対象〉が「受容」されても消滅するか、〈感覚する〉は「働きかけ」ないと思われる）。

この身体の〈sens〉を既出引用文〈Ces objets (de nos sens) qui, excitant quelques mouvements dans les organes des sens extérieurs, en excitent aussi par l'entremise des nerfs dans le cerveau.... (わたしたちの感覚の諸対象はそれぞれ、外的感覚諸器官（のいずれか）において、ある運動を引き起こしながら、神経を介して、脳においてその同じ運動を引き起こす（括弧内は筆者）〉<sup>(251)</sup>で読むと、身体の〈sens〉はどうなるかが分かる。すなわち身体の〈sens〉は引用文に〈脳〉と記されるからして、何よりも先きに、〈脳〉中の〈腺〉に伝えられたのである。

またそこに書かれた〈脳においてその同じ運動を引き起こす〉とする〈同じ運動〉とは、〈ressentir〉が〈理性的精神〉から〈出〉て、前記した目という〈外的感覚器官〉に「働きかける」と同様な〈運動を引き起こす〉ことを含意させねばならぬわけで、〈脳（腺）〉では周知の通り、〈sentir〉が〈腺〉に「受容」される身体の〈sens〉に「働きかける」ことを示唆させずにはいない。だから〈同じ運動〉は当然〈同じ〉という点で、〈ressentir〉にとってみれば、筆者の語る、〈sentir〉の「息のかかった」表現での〈運動〉でしかなくなるであろう。

さらに〈腺〉が〈精神（âme）〉とみなされるは〈腺〉で〈sentiment〉を産出したからであった。だがその際の〈脳（精神）〉の捉え方で注意すべきは、「日常的用法」の精神には、〈腺〉である〈âme〉と〈脳本体〉である〈理性的精神（âme raisonnable）〉の両方が同時に存しているのではなかった。デカルトは〈脳〉全体をもって精神とみるのではなく、



こうした〈腺〉での〈sentiment〉や、〈脳本体〉での〈passion〉などの各「新たな能力」の産出において、その都度〈腺〉や〈脳本体〉のそれぞれを精神として見立てていただけないのである。

そこでは〈脳本体〉たる〈理性的精神〉は「先天的」精神に、〈腺〉たる〈精神〉は前段までに触れたことから、「後天的」精神になるといつてかまわなくなる。しからば筆者がなかでも、〈理性的精神〉のことをそう語り得るのはなぜか。それはデカルトにあって、〈理性的精神〉には〈ressentir〉や〈sentir〉をはじめとする諸能力が存していなければならなかったし、こうした諸能力が〈思惟する〉<sup>(252)</sup>であり、〈思惟する〉が精神だけの能力といわれる以上、諸能力は「先天的」精神より発信させるほかなかったからである。諸能力がいわば発信する居場所を、彼が「先天的」精神に設定せずして、いずこにみられるといい得るのか、もはや〈理性的精神〉以外に捉えることは不可能なのである。別言すると彼は諸能力を「先天的」と断じ、これらをば〈脳本体〉の能力とし、〈脳本体〉を〈思惟する〉〈理性的精神〉と名付けるしかなかったということである。

しかし〈理性的精神〉に当初より組み入れられていた〈sentir〉（や〈imaginer〉）がそこから〈出る〉ことによって、〈理性的精神（脳本体）〉には〈理性的〉とされる能力だけが居座り、〈脳本体〉はまことに〈理性的精神〉の名を与えられるにふさわしくなった。なぜなら「日常的用法」における〈理性的精神〉は、デカルトがあたかも〈真理の探求〉をさしている〈Je ne suis donc, précisément parlant, qu'une chose qui pense, c'est-à-dire un esprit, un entendement ou une raison（それゆえ正確にいつて、わたしは思惟するもの、すなわち精神、悟性、理性でしかない）〉<sup>(253)</sup>なかでの能力の語に比べても、〈悟性、理性〉の能力しか残しはしないからである。もとより〈真理の探求〉における〈悟性、理性〉ならびに〈わたし〉と〈精神（esprit）〉の意味や用法が、「日常的用法」のそれらと異なることは承知している。それでは〈真理の探求〉の〈わたし〉、〈精神〉と〈悟性、理性〉とは何か、なかでも〈精神〉はいずこを示すか、少なからず〈脳〉自体を〈精神（esprit）〉に見立てることではないし、他の事柄はこの〈精神〉が語るところに倣って読み取らねばならなくなるはずである（次回以降に譲る）。

それはともかく、〈理性的精神〉に関し、その内部で「働きかける」とした〈vouloir〉などの諸能力によって、〈passion（情念）〉が生み出されると何度となく述べてきたが、筆者はここで、この諸能力の例がデカルトに、果たして語られているか、何を意味させるのかを明らかにしておかなければならない。まず彼によると、〈情念〉は二つの場合から生じてくるという。

①⑨ Il me semble qu'on peut généralement les (passions) définir des perceptions, ou des sentiments, ou des émotions de l'âme, qu'on rapporte particulièrement à elle, et qui sont causées, entretenues et fortifiées par quelque mouvement des esprits.<sup>(254)</sup>（括弧内は筆者）

わたしには、情念がとくに精神に関係づけられ、また（動物）精気の何らかの運動によって引き起こされ、持続され強められる精神の、知覚であり、感覚であり、情動であると一般的に定義し得るように思われる。（括弧内は筆者）

デカルトは上記引用文①⑨中の〈精神に関係づけられ〉る、ならびに〈(動物) 精気の何らかの運動によって引き起こされ〉ることを、『情念論』の他の箇所でも、〈les mouvements, tant de la glande que des esprits et du cerveau, qui représentent à l'âme certains objets (精神に、ある種の対象を表わさせる、腺の、(動物) 精気の、要は脳の運動)〉<sup>(255)</sup>と換言するし、さらに〈tous les mouvements des esprits et de la glande qui excitent en nous les passions (わたしたちにおいて情念を引き起こす(動物) 精気と腺のあらゆる運動)〉<sup>(256)</sup>と書き加えるがゆえに、筆者の指摘通り、〈情念〉の産出には〈腺の運動〉と〈(動物) 精気の運動〉による二つの場合が想定されるわけである。しかれども筆者があえて註(255)の〈et du cerveau〉の〈et〉を〈要は(脳の運動)〉と訳したのは何か。もとより、〈腺の運動〉は〈脳〉の一部位としての〈運動〉であり、〈(動物) 精気の運動〉もまた、〈心臓〉などではなく、〈脳〉しかも筆者のみるところ、〈脳の凹み〉における〈運動〉なのであって、このいずれも〈脳〉に関連した〈運動〉であることに間違いのないからである。

以上から筆者は、〈腺の運動〉とは〈腺〉に〈sentiment〉を産出させる〈運動〉をさすとともに、〈腺〉の「〈細糸が互いに離れてい〉る」<sup>(257)</sup>ために、その〈sentiment〉を〈腺(H)の表面に〉<sup>(258)</sup>は描かせないで、〈脳本体(理性的精神)〉に伝える〈運動〉であり、もっぱら〈神経〉を経由させて伝達されるし、〈(動物) 精気の運動〉とは身体の〈sens〉が〈腺〉で〈sentiment〉にならずに、すなわち身体の〈sens〉のままに、〈神経〉から〈脳の凹み(cavités du cerveau)〉<sup>(259)</sup>に伝わる〈運動〉であり、これにもっぱら〈血管(動脈)〉の〈血液〉を混ぜさせることにある。要するにこれらの〈運動〉が〈情念〉を生み出す各契機になると同時に、〈情念〉は〈神経〉や〈血液〉を通してももたらされ得るといえるわけである<sup>(260)</sup>。また註(255)の〈certains objets (ある種の対象)〉は複数形表記がゆえに、〈sentiment〉と身体の〈sens〉をば当然〈対象〉に含ませ捉えることが前提であろう(その際〈à l'âme (精神に)〉と記される〈精神〉に、たとえば〈脳の凹み〉が該当するか問題になる(一方の〈腺の運動〉だけが〈âme〉にかかわるのか、それで引用文文脈上適切なのか)が、後述で多少、また次号でも検討する)。

〈情念〉をもたらし身体の〈sens〉についてはすでに一見した<sup>(261)</sup>から、ここでは〈理性的精神〉の〈vouloir (意志する)〉などの諸能力の〈能動〉によって、〈情念〉が成る場合を見届けなければならない。これは筆者が先きに問うた、「諸能力の例がデカルトに、果たして語られているか、何を意味させるのか」に答えることでもある。換言すると、彼が諸能力の例をいくつか掲げるは、諸能力をして〈腺の運動〉にかかわらせることを、したがって諸能力の〈腺の運動〉へのかかわりは〈腺〉の〈神経〉たる「〈細糸が互いに離れてい〉る」<sup>(262)</sup>結果による〈sentiment〉を、〈理性的精神(脳本体)〉の〈神経〉に伝達(受容)させる〈腺の運動〉に対して、〈理性的精神〉の諸能力がこの〈sentiment〉に「働きかける」にあることを示すためであった(「何を意味させるのか」の答えはだから、諸能力が〈腺の運動〉にかかわるとみることにあろう)。

諸能力の記されよう文章が早速引用されるべきだが、筆者はその前に、デカルトが〈âme (精神)〉の語を多用するにしても、〈âme〉にはこれまで述べてきた〈脳本体〉や〈腺〉が充当されるわけだから、彼がその都度いずれの〈âme〉として用いるかを明確にしないことは、筆者に〈âme〉の理解を困難にさせることに触れておかざるを得ない。たとえば引用文①⑨の〈âme〉や〈elle〉、引用語句註(255)の〈âme〉を取り上げてみよう。通常これ

らの語はみな〈理性的精神 (âme raisonnable)〉と理解し得る。だが「日常的用法」において、〈âme〉は繰返すが、ときに〈腺〉であり、〈腺〉が〈精神〉に見立てられないときに〈脳本体 (理性的精神)〉であった。

デカルトは〈理性的精神〉と明示する場合もあるが、以上の例で分かる通り、たんに〈âme〉とも書くからして、これはもしや〈腺〉ではないかと疑わせ得るのである<sup>(263)</sup>。そこで間違いになるのは知っていても、引用文⑩中の〈情念がとくに精神に関係づけられ〉るとの〈精神 (elle)〉を〈腺〉に当てはめるとどうなるかが質される。当然〈elle〉が〈âme〉の代名詞ゆえに、一方に記された〈âme〉も〈腺〉でなければならず、その〈腺〉が〈知覚、感覚、情動〉要は〈情念〉を生み出すことになりかねない。これでは引用文⑩全体の読みを不正確にさせるから、そもそも〈elle〉を〈腺〉にみなすは不可能であろう。

しかし〈腺〉が〈腺の運動〉の一として、〈sentiment〉の産出にかかわっていただけは確かなことである。そのとき〈腺〉は〈âme〉であった。だからまた引用語句註(255)での〈âme〉は、その〈腺〉になり得ないか疑問に感じてくる。なぜなら〈腺の運動〉が〈ある種の対象〉の一たる〈sentiment〉を〈腺 (H) の表面〉に表出させた際、〈腺〉は〈âme〉でしかなくなるからである。だが〈âme〉を〈腺〉にみなせば、〈(動物) 精気の運動〉も〈âme (腺)〉の〈運動〉に組み入れなくてはならなくなろう。〈(動物) 精気の運動〉は〈情念〉にかかわらせる場合において、これは不可能な見方なのである。このように、デカルトが〈脳本体〉や〈腺〉なる二つの精神をその都度区別させずに表記したことには、何らかの意図からか、それともこの意図を読み取れない筆者側が、どちらの精神をさすかは取り上げた引用文の文脈に合わせて見定めることを強いるからか、答えが見出されないが、筆者からすると少なくとも、紛らわしいし、親切ではないという印象が否めないのです。

それと同時に、デカルトが引用文⑩で、〈情念が(動物) 精気の何らかの運動に引き起こされ、持続され強められる〉と書き記したことも気になる。なぜなら彼が〈腺の運動〉にかかわる、〈Afin de les (passions) distinguer de nos volontés (情念をわたしたちの意志から区別するため)〉<sup>(264)</sup> の〈情念〉をその〈(動物) 精気の運動〉によってみようとするれば、この〈情念〉の産出は引用文⑩の〈âme (理性的精神)〉ではない部位で可能になると語るからである。すなわち〈Elles (passions) sont principalement causées par les esprits qui sont contenus dans les cavités du cerveau (情念は主に、脳の凹みに含まれる (動物) 精気によって引き起こされる)〉<sup>(265)</sup> と。要は〈(動物) 精気〉の場合、〈情念〉は〈脳の凹み〉で成るともいうのだ。だから引用文⑩の〈âme〉が〈(動物) 精気の運動〉にかぎっては、〈腺〉とされるは不適當なのである。

確かに〈情念をわたしたちの意志〉に関係させる〈運動〉は〈腺の運動〉をもって、〈理性的精神〉内に「受容」された〈sentiment〉に〈vouloir〉などが「働きかける」ことをさすが、今問う〈情念〉は〈(動物) 精気の運動〉にかかわるがゆえに、その〈l'inégale agitation de ces esprits et la diversité de leurs parties ((動物) 精気の不規則な振動と(動物) 精気諸部分の多様性)〉<sup>(266)</sup> という、引用文⑩の〈何らかの運動によって〉、デカルトが一度も〈âme〉と断じたことのない〈脳の凹み〉に関与される。すると再度いうが、引用文⑩の〈âme (理性的精神)〉を暗示させる、その表記は正しいのかとなる。ただし後述で〈affection (感情)〉について言及するが、かの身体の〈sens〉が〈脳の凹み〉の〈(動物) 精気の運動〉により、そこで〈affection〉になるか、身体の〈sens〉のままで〈脳本体

〈理性的精神〉の〈孔 (pore)〉<sup>(257)</sup> に入る場合、引用文⑱の〈âme〉は〈理性的精神〉に間違いなかろうとも、果たして彼はこの場合を想定させて、引用文⑱を記したのであろうか。それすら〈不明瞭〉なのである。

とまれ以下に、〈理性的精神〉の諸能力〈vouloir〉などがそこに〈腺の運動〉によって「受容」された〈sentiment (感覚)〉に対して「働きかける」という、いくつかの例文を掲げておこう (これらは〈神経〉を介した、〈能動〉としての〈情念〉を生み出す)。

⑳ En sorte que le sentiment de la peur l'âme incite à vouloir fuir, celui de la hardiesse à vouloir combattre.<sup>(268)</sup> (括弧内は筆者)

たとえば、恐れのは感覚は精神をして逃走を意志するように仕向けさせるし、大胆の感覚は精神をして戦いを意志するように仕向けさせる。

㉑ Lorsque la première rencontre de quelque objet nous surprend, et que nous le jugeons être nouveau, ... cela fait que nous l'admirons et en sommes étonnés.<sup>(269)</sup> (点線部分は筆者)

わたしたちは、何らかの対象との出会いがわたしたちの意表をつき、しかもこれを新しいと判断するとき、... その対象にたまげ、驚倒する。

㉒ Nous pouvons aussi considérer la cause du bien ou du mal, tant présent que passé. Et le bien qui a été fait par nous-mêmes nous donne une satisfaction intérieure, qui est la plus douce de toutes les passions, au lieu que le mal excite le repentir, qui est la plus amère.<sup>(270)</sup>

わたしたちは、現在と過去の、善悪の原因をも考えることができる。そして、わたしたち自身によってなされた善は、わたしたちにあらゆる情念のうちでもっとも快い内的満足を与えるのに、わたしたち自身によってなされる悪は、もっとも苦い後悔を引き起こす。

上記引用文⑳は〈理性的精神〉に「受容」(伝達)された〈腺〉で、その「〈細糸が互いに離れてい〉」た結果による、〈恐れ〉や〈大胆〉という〈感覚 (sentiment)〉に各「働きかける」、〈理性的精神〉の〈vouloir (意志する)〉がみられてこそ、各〈逃走〉や〈戦い〉を促し得るのを明かすならば、各〈逃走 (弱気)〉や〈戦い (強気)〉たる〈情念〉はこの〈意志する〉なしには生じてこないであろう。だからこれと同様に、引用文㉑の〈juger (判断する)〉も、同㉒の〈considérer (考える)〉も、おのおのが〈意表をつく (驚かせる) 対象〉に、〈現在と過去の、善悪 (なる感覚) の原因〉に「働きかける」がゆえに、〈驚倒〉、〈内的満足〉や〈後悔〉たる各〈情念〉を生み出すことになるわけである。そこで〈意志する〉、〈判断する〉や〈考える〉などが〈理性的精神〉に属す諸能力と捉えずば、これらはいずれこの諸能力か、このような〈情念〉を主として産出させる〈脳〉の部位はど

こにあるというのか、もはや「先天的」にあるとされる諸能力は、主たる〈情念〉は〈理性的精神（脳本体）〉以外には見出されはしないということである。

ところで〈理性的精神〉内で「働きかける」諸能力に関して、デカルトは筆者が「時間的経過」のもとで使用するとみた〈ressentir〉が、〈腺〉にしか「働きかけ」ないと察知していた〈sentir〉があると語る。〈ressentir〉についてはすでに言及したことに譲って、ここではその〈sentir〉をどう理解するかを述べる。『情念論』中に、〈Il est impossible qu'elle (âme) les (passions) sente sans qu'elles (passions) soient véritablement telles qu'elle les sent (情念は真に、精神が情念を感じる通りになくは、精神は情念を感じない)〉<sup>(271)</sup> や〈pour faire sentir à l'âme cette passion (精神にこの情念を感じさせるために)〉<sup>(272)</sup> の一例が記される。まず上記引用文章や語句での各〈âme〉は〈理性的精神（脳本体）〉をさすのを確認しておこう。なぜなら〈腺〉なる〈âme〉は〈情念〉を産出しないから。さすれば〈理性的精神〉で産出した〈情念を感じる〉のが〈sentir〉であるほかなくなる。すなわちこの〈sentir〉は、〈情念〉を生み出すために「働きかける」能力であり得ずに、一度にすでに成った〈情念〉に対して〈感じる（働きかける）〉能力として使われていたのである。〈腺〉に用いる〈sentir〉と、〈理性的精神〉に用いるこの〈sentir〉（あるいは〈ressentir〉）の相違を、それでも彼は次のようにして明確に表示する。〈腺〉での〈sentir〉の直接目的の名詞には、〈Je sens de la chaleur〉<sup>(273)</sup> の例のごとく部分冠詞が使われるのに比べ、〈理性的精神〉での〈sentir〉は少なくともその使用にない（上記引用文章や語句で表現される通り、定冠詞的用法を有する）。

また〈ressentir〉もほぼ前段の用い方に等しくなる。身体の〈sens〉を身体内外諸器官で産出させる場合、デカルトがたとえば〈Quand je ressens de la douleur au pied〉<sup>(274)</sup> と記しては、〈ressentir〉の直接目的の名詞に部分冠詞を使う。だが〈理性的精神〉で用いる例を、〈Je ressentais aussi en moi la faim, la soif〉<sup>(275)</sup> でみると、〈ressentir〉の直接目的の名詞には定冠詞が使用されると同時に、〈Je〉はともかくも、〈en moi（わたしのうちに）〉と書かれるかぎり、ここで〈飢え〉や〈渇き〉を〈再び感じる〉は〈理性的精神〉においてでなければならない。すると〈理性的精神〉での〈sentir〉や〈ressentir〉に続く定冠詞的用法の名詞（〈情念〉、〈飢え〉や〈渇き〉）をば、〈sentir〉や〈ressentir〉それぞれが互いに前後にして、〈感じ〉たり、〈再び感じ〉たりすることも可能なように思われるのだが、しかしそこに違いがあるとすれば何か、そここのところが今一つ明確に伝わってはこないのである<sup>(276)</sup>。

これにもまして、筆者が次の引用文を掲げるやいなや、〈ressentir〉の直接目的の名詞に付された冠詞が前段までに語った用法を覆させるのに出会うことになる。その際、引用文中の〈affection（感情）〉の語に主に注意してみる。

②③ Je ressentais en lui (corps) et pour lui (corps) tous mes appétits et toutes mes affections.<sup>(277)</sup>（括弧内は筆者）

わたしは、あらゆる欲求とあらゆる感情を身体の中に、しかも身体のために感覚していた。

〈ressentir〉に続く直接目的の名詞への冠詞使用にあつて、筆者は定冠詞ならば、〈理性的精神〉内で「働きかける」〈ressentir〉として捉え、これを〈再び感じる〉と、部分冠詞ならば、身体（内外諸器官）に「働きかける」〈ressentir〉と指摘しては、これを〈感覚する〉と訳してきた。だから引用文②の〈ressentir〉をも〈感覚する〉とした以上、〈ressentir〉は身体にかかわる能力の意味しか持てなくなる。それならば、これに伴う名詞には本来部分冠詞が用いられてしかるべきなのに、定冠詞的語（所有形容詞）が使われる、当の〈affection（感情）〉は、デカルトの用法において何かとなる。

これを考えるに、まず〈affection〉に並置される〈appétit（欲求）〉には、辞書に「生理的」という意味があるから、〈affection〉も身体自体に惹起する「新たな能力」とみてよからう。そうでなくとも引用文②に、それを示すかのごとく、〈身体の中に、しかも身体のために〉と記されてあるではないか。しかしこの〈affection〉は身体内外諸器官それ自身によって産出されるのではない。まして〈脳本体〉でもない。なぜなら〈脳本体〉で〈affection〉を産出させるかぎり、〈脳本体〉は身体でなく、〈（理性的）精神〉でなければならなかったからである。

たとえば身体内外諸器官の一で産出された身体の〈sens〉が〈腺〉で〈sentiment〉になるように、〈affection〉もまた、いずこで産出をみるかは後述するが、ある身体内外器官で生み出された身体の〈sens〉が基本となることは確かなのである。すなわち身体の〈sens〉を抜きに〈affection〉も成らないということである。繰返しいうが、身体の〈sens〉は内外対象に「働きかける」〈ressentir〉によって産出され、身体の〈sens〉〈ressentir〉の直接目的の名詞）自体を部分冠詞に表わすものに相当した。部分冠詞は内外対象に対する〈ressentir〉の若干の「働きかけ」のために、換言すると〈感覚する〉が身体の〈sens〉の何らかの部分に「働きかけ」たにすぎぬために使用されよう。さらに身体の〈sens〉を「受容」し、〈sentiment〉を産出する〈脳〉の部位〈腺〉が、また〈sentiment〉を「受容」し、〈passion〉を産出する〈脳〉の部位〈脳本体〉があった（両部位でのことは〈腺の運動〉による）。だから〈腺〉で〈sentir〉が、〈脳本体〉で〈vouloir〉など、あるいは〈sentir〉や〈ressentir〉が各「働きかける」ならば、各動詞に続く直接目的には結局身体の〈sens〉に関連する名詞が配置されるかぎり、その限定された冠詞（定冠詞（的語））が名詞を修飾するのでなければなるまい。

しかしデカルトのいう〈affection〉の用法は、これが〈腺〉や〈脳本体〉のどちらでも、つまりその都度各〈精神〉と呼ばれる部位のいずれでも産出されるのではない。むしろ〈affection〉を形容する所有形容詞は、上記両部位以外の〈脳〉の部位に「受容」される身体の〈sens〉を基にするがゆえの定冠詞的用法に等しい（不定形容詞はこの身体の〈sens〉の全体を表わす）。身体の〈sens〉の一いちに、またはそのすべてに〈ressentir〉が「働きかける」と、〈affection〉を産出させる。しからばこの産出部位はどこか。

それを説明するには、実は身体の〈sens〉のことが再度想起される必要がある。だがその整理事項の多さに対する紙数があまりないので、ここはこの結語を述べるだけにし、詳細を次号に譲るほかない。結語の一は、〈affection〉を産出する部位を〈脳の凹み〉とみることにある。これは〈affection〉産出のもととなる、身体内外諸器官で生じた身体の〈sens〉がそれ以降、〈脳の凹み〉に「受容」される場合である。身体の〈sens〉は別の場合、〈腺〉に（あるいは〈脳本体〉にはその〈sentiment〉として）「受容」されたし、また別の場合、

身体の〈sens〉のままで〈脳の内〉を通り、〈脳本体〉の〈孔〉に入った。身体の〈sens〉の〈腺〉経由は〈神経〉運動に、その〈脳の内〉経由は〈(動物) 精気 (血液)〉運動に関与した。かつ〈脳本体〉での〈情念〉ならびに〈affection (愛情)〉<sup>(278)</sup>は〈腺 (神経) の運動〉に、〈脳の内〉での〈affection (感情)〉は〈(動物) 精気の運動〉と〈ressentir〉の〈能動〉によっていた。〈感情〉において、〈脳の内〉はたえず身体に捉えられるから、〈感覚する〉がこの身体に他の身体と同様「働きかける」は間違いないが、それでもこれは〈ressentir〉が〈脳本体〉から〈出〉て、〈脳の内〉の〈(動物) 精気 (血液)〉に「働きかける」を示唆させることなのであろうか。(これも〈情動〉とともに次号に譲る。)

〔続〕

# 註

以下の註の番号が<sup>(234)</sup>から続くのは、本稿が前号『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑤)』の脱稿と同時に書かれたものであるからである。

<sup>(234)</sup> 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑤)』P.P.17-18, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第115輯, 2004年参照。

<sup>(235)</sup> René DESCARTES 《A MERSENNE novembre ou décembre 1632》P.263 (《ŒUVRES DE DESCARTES correspondance I, CHARLES ADAM et PAUL TANNERY, VRIN) 〈l'ay defia écrit celles (fonctions) qui appartiennent à la vie, comme la digestion des viandes, le battement du poulx, la distribution de l'aliment &c., & les cinq sens. l'anatomie maintenant les testes de divers animaux, pour expliquer en quoy consistent l'imagination, la memoire &c. (括弧内は筆者) (わたしはすでに生命を維持しよう諸機能について書き記しおいた。それはたとえば食物の消化, 脈搏の鼓動, 栄養の供給などや五感である。現在わたしは想像, 記憶などがいかに成るかを説明すべく, さまざまな動物の頭脳を解剖している)〉参照。メルセンヌ宛の手紙で語られることは, デカルトの『人間論』の執筆中の経緯をさすと予想し得る。こうして彼は〈五感 (身体)〉について書き終えたと記すのだから, 〈動物の頭脳〉の〈解剖〉によって, (頭) 脳はいかなる構造を有するかが判明し, そのうえに立って〈五感 (身体)〉がこの脳といかなる関係をもつか否かを, たとえば神経とのかかわりで見出し確かめ得よう。

<sup>(236)</sup> 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑤)』P.P.12-13, P.P.13-14, P.16参照。

<sup>(237)</sup> 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④)』P.59, P.70の註<sup>(175)</sup>ならびに同註欄, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第114輯, 2004年参照。

<sup>(238)</sup> 同上紀要 P.54註 (174) 参照。

<sup>(239)</sup> 同上紀要, 引用文<sup>(17)</sup> P.56, なお筆者は同紀要で〈sentir〉に, 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑤)』で〈ressentir〉についてまとめおいた, 参照。

<sup>(240)</sup> 〈ressentir〉には, 本文に記す用法のほか, 他の用い方も確かに見受けられる。紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④)』の註<sup>(195)</sup>註欄 P.72と註<sup>(199)</sup>と註<sup>(200)</sup>の各註欄参照, そこには「時間的経過」にあつての〈ressentir〉の使い方が記される。その際筆者は, この能力が〈精神〉の能力として「働きかける」ことに間違いないと改めて断じ得ても, しからばいかなる〈精神〉で「働きかける」のかと問われるならば, それは〈精神 (腺)〉ではなく, 〈理性的精

- 神（脳本体）で可能になるとここに明確に答えておく。なぜなら〈sentir〉と同様、〈ressentir〉も〈理性的精神（脳本体）〉に属する諸能力の一であるとみておくべきであるからだ。
- (241) 同上註(240)註欄参照、ただしこの場合、〈ressentir〉は身体のためにさしむけられた、身体用の能力としてあるのではなく、〈理性的精神〉という精神の能力としてあるし、おそらくそこで〈sentiment（感覚）〉や〈passion（情念）〉を「時間的経過」のもとに〈再び感じる〉能力になるにちがいない。
- (242) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』P.P.61-62参照。
- (243) 実験の一例は、本稿註(235)註欄参照。
- (244) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ①〕』P.P.27-28, 引用文⑥の⑥, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第112輯, 2003年参照。
- (245) Simone WEIL 《SCIENCE ET PERCEPTION DANS DESCARTES》P.39, Gallimard（紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』P.P.17-18引用文㉔, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第110輯, 2002年）参照。
- (246) Ibid., P.44。
- (247) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』P.59, P.70註(175)註欄参照。
- (248) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ⑤〕』P.P.18-19, 註(229), P.22註(229)註欄参照。
- (249) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅴ〕』P.37, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第109輯, 2002年参照。
- (250) 同上 P.41（本文内容はこの紀要 P.P.40-42ですすでに見している）参照。
- (251) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』P.P.56-57, 引用文⑱参照。
- (252) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅳ〕』P.1, 引用文⑰と⑱, P.9, 引用文㉒, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第108輯, 2002年参照。
- (253) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅰ〕』P.22, 引用文④参照。
- (254) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》ART.27, P.P.708-709, Gallimard.
- (255) Ibid., ART.50, P.721。
- (256) Ibid., ART.50, P.722。
- (257) 本稿註(250)註欄（また同註(249)註欄）参照。
- (258) 紀要『デカルトにおける理性と感覚(4)』P.68, 引用文㉖中の語句, 新潟大学人文学部人文科学研究, 第101輯, 1999年参照。
- (259) 紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅴ〕』P.27引用文㉕（また本稿後記の註(265)）参照。
- (260) 同上 P.33, 引用文㉑の身体の〈sens〉（なお上記註(259)引用文㉕の〈細かな粒子〉は「身体の〈sens〉」として理解されてよい）参照。
- (261) この身体の〈sens〉については、同上紀要 P.P.42-59参照。また次号にでも再度検討する。
- (262) 〈細糸〉が〈神経〉の一であることは、同上紀要 P.33, 引用文㉑中に記される。
- (263) これまでの引用文のうち、〈理性的精神〉と明記されるそれは、本稿註(258)で取り上げた紀要の引用文㉖であるし、〈âme〉が〈腺〉であると捉えられる引用文は、紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔Ⅱ〕』P.73, 引用文⑩（新潟大学人文学部人文科学研究, 第106輯, 2001年）である。
- (264) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》ART.29, P.709, Gallimard.
- (265) Ibid., ART.37, P.714.
- (266) Ibid., ART.14, P.P.702-703.
- (267) 〈A mesure qu'il en (les esprits) entre quelques-uns dans les cavités du cerveau, il en (les



esprits) sort aussi quelques autres par les pores qui sont en sa substance (ある(動物)精気が脳の凹みに入るにつれて、他の(動物)精気は脳本体にある孔を通して出る))と記されるから、〈脳の凹みに入〉った〈(動物)精気〉はすぐには〈脳本体〉の〈孔〉に流れない(入らない)が、筆者のみるところ、〈脳の凹み〉に入った〈(動物)精気〉は、その部位で〈神経〉によって運ばれた身体の〈sens〉と〈混交〉し、〈ressentir〉の〈働きかけ〉を受けて〈affection(感情)〉の産出に貢献すると同時に、その〈(動物)精気の運動〉によっては、〈脳本体の孔〉に流れると、また〈他の(動物)精気〉の〈他〉とは〈脳の凹み〉でこの〈血液〉と〈混交〉をなしても、〈ressentir〉の「働きかけ」を受けない身体の〈sens〉をさし、身体の〈sens〉のままを含み込んだ〈(動物)精気〉は〈脳本体の孔〉に向けて流れると捉えられる(なお以上のこと、さらに〈孔〉については次号以降で検討する)。Ibid.,ART.10, P.700.

(268) Ibid.,ART.40, P.715.

(269) Ibid.,ART.53, P.723.

(270) Ibid.,ART.63, P.726.

(271) Ibid.,ART.26, P.708.

(272) Ibid.,ART.36, P.713.

(273) René DESCARTES 《MÉDITATIONS》 troisième, P.287, Gallimard.

(274) Ibid.,sixième, P.331. この註(274)と註(239)の、身体(内外諸器官)で「働きかける」〈ressentir〉の直接目的たる名詞の冠詞用法は、本文註(274)の上記や以下に記す、〈脳本体(理性的精神)〉における、「時間的経過」にあつての、およそ〈再び〉を合意させよう〈sentir〉とりわけ〈ressentir〉のその冠詞の使い方とは当然区別し得るにしろ(〈再び〉がゆえに定冠詞(的用法)になるし、身体(内外諸器官)と〈脳〉という身体部位の相違がみられるから)、それでも同じ身体(内外諸器官)で生み出される能力の一方に、註(274)のごとく部分冠詞を、他方に註(239)のごとく定冠詞を用いたりするのに、いかなる理由を見つけることができるかである。註前者の引用文では、〈au pied〉の語のもとで、〈苦痛(痛覚)〉を〈足に〉〈感覚する〉というのだから、註後者の引用文のような、〈苦痛(痛覚)〉たる総称や限定(定冠詞)でなく、〈苦痛(痛覚)〉の若干量(部分冠詞)を〈感覚する〉と、また註後者の〈ressentir〉は〈voir〉や〈ouïr〉の視聴の役割分担に対応するよう倣わせ、この知覚(感覚)動詞と同様に、総称や限定(定冠詞)として用いられると受け取るほか、理由が見出されにくい。が少なからず、身体(内外諸器官)での〈ressentir〉の直接目的たる名詞には、デカルトにあつて、部分冠詞や定冠詞両方の使い方が許されると認められるだけは確かであろう。

(275) Ibid.,sixième, P.320.

(276) 〈sentir〉も〈ressentir〉も結局「時間的経過」のもとに使われていることになる。だとすれば両者の相違とは何か求められるが、浅い読みしかできない筆者には答えを見出せなかった。〈ressentir〉が〈理性的精神〉で使われることは、すでに紀要『シモーヌ・ヴェーユとデカルト〔補Ⅲ④〕』註(199)註欄と註(201)註欄に説明してある。

(277) René DESCARTES 《MÉDITATIONS》 sixième. P.321, Gallimard.

(278) René DESCARTES 《LES PASSIONS DE L'ÂME》 ART.82, 83, 133, 145, 150, 201に出る〈affection〉は〈感情〉より〈愛情〉の訳がふさわしいとみる(次号以降参照)。